
暴力団だった君へ

椎子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴力団だった君へ

【Nコード】

N1403W

【作者名】

椎子

【あらすじ】

柔らかく優しい時間の中で、君と揺れている。

君の背中には阿弥陀如来様が、ドン！と居てる。

君は、暑い吐息でわたしの腰を抱く。

本当に君が好きだよ。大好きだ。

君と出会って、もう7年。

君に、初めて声をかけられたのは、南里精神病院の入口玄関前だった。

通りすぎるわたしに、君はこう呟いた。

「きれいだね。」

この頃のわたしといえば、両目は左右に離れ、時に白眼にひっくり返る「ゾンビ現象」を起こしていたというのに。

わたしは、その言葉に吸い込まれるように

君のそばに寄ったんだ。

君はこう言った。

「なんで、ここに居るの。」

わたしは思った。精神病院で出会ったんだから、病気なのに決まってるじゃない、と。

君はわかっていたんだね。わたしが、ここに居ながら実は、とても清々しい気分でいた事を。

体内を駆け巡る悪霊精分が、少しずつほぐれ、柔らかな表情になっている事を。

それにしても、右目、左目、どっかに向いてたと思うけど…？

こうして君を抱いていると、正直わからない。

その腕、肩にせり上がる君の美しい模様が、わたしの両耳横に立てられる。

ゆっくり腰を動かす君。

思わず声が漏れる。

このまま、果ててゆくのだろう。枯れ果てる？

それとも、また咲くの？

わからないけど、このまま君と、ずっとこうしていたい。

平凡な主婦のわたしは、普段、君の事なんか思い出せない。

もちろん、昼間、メールしたり、時々はスカイプしたり、するけど。君とどんなに長く話しても、切った後、何を話したのか、いつも全く覚えてないんだ。

でも、確かな事は、話す前と話した後とでは、心の重さが変わっている。

なにかに笑い、なにかを吐き出す作業を、繰り返せたんだろう。

こどものできない、犬と夫とわたしの3人暮らし。

こんな生活の中で、一番のわたしの心の支えといえば、

元暴力団で現在は大学生してる、背中一面に、紋紋はやしてる、君なんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403w/>

暴力団だった君へ

2011年10月9日14時43分発行